



ピッポ新聞

2004

9

No. 191

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500 円

編集・発行 伊藤俊男

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

Email pippo@diana.dti.ne.jp

大型絵本について考えてみる その6

今月号は福音館の書籍編集部長の大和さんからお返事をいただきましたので、先ずこれを掲載いたします。次に絵本作家のたむらしげるさんからメールで「大型絵本」について作者としてのお考えをお寄せいただきましたので、続けてこれを掲載し、最後に大和さんのお返事に対する多くの返書を書きました。細かくて長い文ですが、どうぞお読み下さい。

なお、大和さんの文も、たむらしげるさんの文も横組みでしたが、編集の都合上縦組みに直し、それに伴い改行をこちらでさせていただいた部分がございますことをお断りいたします。

子どもの本の店「ピッポ」 伊藤俊男様

たいへんな暑さが続いておりますが、いかがお過ごしでしょうか。いつも小社に格別のご高配を賜りまして厚くお礼申し上げます。さて、「ピッポ新聞」に掲載されている「大型絵本」の件、7月号で6月号の質問に答えていないとのこと指摘をいただきましたことにお返事させていただきます。

遅くなりましたのは、5月にお手紙をさし上げた中ですべてをお話しさせていただいたと思っておりますので、再度の質問にどのようなよう

話すればご理解いただけるかたいへん悩み考え込んでしまったためでございます。

お返事に繰り返しのご説明がありますことは、どうぞご容赦の上お読みくださいますように。

ひとつ申し上げられますことは、伊藤さんが記事の中で、例えば「大型絵本」は「歯磨きの嫌いな子を好きにさせるような」実用向きの本であり、「読み聞かせ専用と用途を規定して出版された絵本は聞いたことがない」と仰つていますが、当然ながら、小社は、本が嫌いな子に大型絵本を読み聞かせすれば、必ず本好きになるなどと思っております。文章と絵が同じ絵本をサイズを変えて大型にしたところで、そのような魔法を発揮するとも考えていません。ただ、絵本には様々な出会い方があり、大型絵本がある状況においては、その入口の役割を果たし、通常の絵本へと子どもたちの世界が広がっていくことはあるだろうと考えています。親子が一緒に参加するイベント等で大型絵本の楽しさを共有したあと、親子で通常の絵本の世界へと繋がってゆくこともあるかもしれません。それがあえて大型である必要はないという考えは、伊藤さんの考え方として理解いたしました。小社はそれが大型絵本であつてはいけないという考えには立っていないとお話するしかありません。

また、伊藤さんが一切の大型化を否定しているわけではなく、「いわゆる絵本とは違い、どちらかと言えば遊びの道具として考えれば良いのだと思います。だから、原作のイメージがどう

たらこうたらなどは、野暮というものです」と書かれています。ここも私もと大きく見解の異なるところです。絵本は著者にとって文章も絵もたいへんな時間と労力をかけて完成した作品です。その作品を原作のイメージを損なわないようにしてほしいと考えるのは、著者や出版社のわがままであり野暮なのでしょうか？

読者から絵本の大型化の許諾を求める声に対して、著者が「大型にするなら、読者の手により手書きで模写されるより、福音館につくってほしい」と願うことは自然なことではないでしょうか。それを「大型絵本は、子どものためではなく、著者にとつて一粒で二度美味しい」と言われては、作品を生みだしてきた著者の皆さまはどう思われるでしょうか。

次に作品選定の基準についてお答えさせていただきます。現在出版している大型絵本「こどものとも劇場」は「こどものとも傑作集」の中でも定着した評価のある作品が選ばれています。もとより売上部数の多い順に選んでいるわけではありません。前回も書きましたが、大型にすることで、より迫力や広がりや奥行きが増し、より細部が楽しめる作品を12点を選び出版させていただきました。

迫力が増し、細部を楽しむことができるようになったところを具体的に語ってほしいとお話しには、比べてみていただかないと申し上げる以外ございません。

伊藤さんは、この件で「ネームバリユーで売ろうと意図した」「むーかしの名前」

で、出ています」などと仰せられておりますが、小社は1点ずつ内容を吟味して出版してきたと、これもまたお答えするしかありません。

さらに伊藤さんが「冗談半分に読者がピーラビットを大型にしてほしいといったらしてしまふのではないかと心配になった」とありますが、小社はピーラビットを大型絵本にする考えはございません。

小社が大型絵本を出版するに際し、この絵本に「こどものとも劇場」というシリーズ名を掲げました。読み聞かせされる場が定まってゆき、通常の絵本との間では棲み分けが図られてゆくだろうと考えたのです。このことは間違いではなかったと今でも思っております。

大型絵本の出版により読み聞かせの現場で通常の絵本が使われなくなつたとの話も聞いておりません。伊藤さんが「大型絵本が保育の現場にほしいなどという保育者は、日常的に子どもに『読み聞かせ』などあまりやっていないからこそ言えることだと思えます。さらに言えば、こういう人は、ご自身が絵本を余り楽しんだことがない(絵本を理解していない)のではと、思えてなりません」と仰っています。これについても伊藤さんの主張としては承ります。が、私もそのような理解には立っておりません。

子どもたちに絵本の読み聞かせすることを楽しんでいる保育者の皆さんも、大型絵本と通常の絵本を使い分けされていますと申し上げたいと思えます。

以上、思うところを申し述べさせていただきました。小社の全ての出版物に全面的なご信頼をいただけることを願ってはおりますが、改めて難しいことと知りました。ゴールデコットの絵本を復刊することも大型絵本を出版することも同じ福音館であることはどうぞご理解いただきたく存じます。

この時代に子どもに対してできることは何か、伊藤さんと小社では目指している方向が大きくずれているとも思えません。今後も一致できることで一緒に進ませていただくことはできませんか？

これから先も子どもたちに提供できるものは何か、小社なりに真摯に考え出版企画を送り出してゆく所存であります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

間もなく秋風がたちます。どうぞお体ご自愛くださいますように。

2004年8月4日

福音館書店書籍編集部長

大和茂夫

続いて絵本作家のたむらしげるさんの「大型絵本」にたいするご自分の作品を通してのご意見です。

なお、この文に出てくる「ありとすいか」(1365円)の普通サイズの絵本はポプラ社から復刊されています。たむらしげるの絵本は多数ありますが、「一千一秒物語」(2310円)はブッキングから、「サン

タのおもちゃ工場」(1260円)、「うちゅうスケート」(1155円)はメディアファクトリーから復刊されています。福音館からは「ロボットのくにSOS」(840円)、「おぼけのコンサート」(780円)が現在出ています。

伊藤さま

はじめまして。たむらしげるです。

偶然、このサイトを見つけて、大型絵本が問題になっていることを知りました。私もポプラ社から「ありとすいか」の大型絵本を出しております。

最初、原寸大に拡大されたカラーコピーで提案されて、作家としてかなり面白く感じました。次にポプラ社から2場面の校正刷りを出してもらいました。この時、小型の絵本には無い、すいかの赤の大きな色面に驚きました。正直申しまして、美しい迫力を感じたのです。

でき上がった大型絵本には、100%とは申しませんが、かなり満足しています。これは、読者がどのように感じるか・・・ではなくて、私自身の気持ちです。

読者の皆さんには申し訳ないのですが、私が絵本を作る時は、最初から読者を考えてはおりません。まず、自分自身が面白いかを重要に思っております。

絵本作りについて、よく誤解されることですが、最初に出した絵本の大きさが、必

ずしも作家が望む大きさでは無いことをご理解下さい。

近年、特にコストや流通の面で大きなサイズの絵本を出しにくくなっております。大きさ、印刷、紙、色数等について作家が決められる事はほんの僅かなのです。

こんな中で大型絵本の提案は、私には魅力に思えたのです。本当はオリジナルで最初から大型絵本を作れば嬉しいのですが、リスクの面で不可能です。

多くの絵本が子供のためと言うことは分かりますし、伊藤さんが読者の事を思っている発言と承知しておりますが、それは、作家にとってプレッシャーともなる事も多いのです。

伊藤さんもご存知と思いますが、昔の絵本は印刷方や大きさなどの試行の結果、様々な面白い絵本が出ております。中には笑ってしまふような絵本もありますが、私はそんな発展途上の絵本を羨ましく感じることがあります。

作家にとって重要なことは、どんな絵本があっても良いという自由だと思えるのです。

「バカな絵本」と、怒らずにそれを面白い・・・そんな気持ちになれないでしょうか？

読者に支持されないものはいずれ淘汰されるでしょう。

たむらしげる

たむらしげるの「大型絵本」に対するご意見で、出版した絵本の版型がかならずしも作者の希望する大きさと限らないことなど、はじめて知ったことの一つです。貴重なお意見ありがとうございました。

福音館書店書籍編集部長 大和茂夫様

残暑厳しいおり、いかがお過ごしでしょうか。再びお返事をいただきありがとうございます。

大和さんからお返事に感謝しつつも、しかし、残念であります。今回の内容も多くの点で満足を得ることができませんでした。

それが何故なのかを考えてみました。その主な原因は、大和さんの回答がこちらの質問の意図とは違っていたり、一部はぐらかしたりする内容になっていることによるのではないのでしょうか。

だが、どうぞ誤解なさらぬでください。ぼくは、「大型絵本」に対する批判を通して、大和さん(「福音館」)が「絵本」をどのように考えているかを知り、多くの読者が「絵本」について考える一助になればと願っているだけなのです。

自分の意見と異なるからと、こちらに同調することを求めているわけではありません。どんな論を展開なされようが一向にかまいませんが、ただ、こちらの質問に正確

に対応をした反論であって欲しいと願うのみでございます。

そこで、今回はこちらの質問の、どの点が答えていただいていないのか、どの点が求めている回答と違うのかを少し明らかにしたいと思えます。

そもそも、最初で最大の質問は「絵本の大型化は本来その絵本がもっている良さや、イメージを損なうことにならないだろうか？言い換えればその絵本の質を変えてしまうのではないか」ということにつきるのです。

しかしながらこれまでのところ、この質問に対して、大和さんから直接のお答えは一度もいただいております。

大和さんのお答えは、ただ原本のイメージを損なわないことにいかに注意を傾けたかという説明でしかありませんでした。そればかりでなく、大型化によって迫力や奥行きがかえって増したというものであります。

これは、少しおかしいのではないのでしょうか。原本のイメージを損なわないように注意を払うということは、原本の絵本が一番良いと認めていることです。大型化によって、より迫力や奥行きが増したとするプラス評価とは矛盾することになりませんか。

そこで、こちらは2度目の質問で、どの作品のどの部分がどう迫力と奥行きが増したのかを具体的に教えてほしいとお願いしたのです。

ところが、その答えが、「比べてみていただくしかない」と申し上げる以外にありません」との回答です。これでは「はぐらかされた」という印象をもたざるを得ません。

この質問こそ、今回の「大型絵本」に対する批判の根幹をなすものだと考えております。

もう一度言います。大和さんにお聞きしたいのは、原本のイメージを損なわないためにどんな努力をしたかということではなく、既に評価の定まっている普通サイズの絵本を大型にしても、何故その絵本の質（芸術性・文学性・子どもの受ける大型と原本の印象の質の違いなど）が変わらないとお考えなのかをお話いただきたいのです。

大和さん、上記の例でもあきらかなように、今回のお返事の中でとても気になった点も他にもございました。

それは「伊藤さんの考えは考えとして理解いたしますが、小社は・・・という考えに立っていないとお話するしかございません」という答え方です。普通は何故多くの考えに立っていないかを（反論）書いてこそ論争はなりたつのではないのでしょうか。なぜ、多くの考えに立っていないかの反論をお願いいたします。

さらに、次の文を取りあげて、

また、伊藤さんが一切の大型化を否定しているわけではなく、「いわゆる絵本とは違い、どちらかと言えば遊びの道具と

して考えれば良いのだと思えます。から、原作のイメージがどうたらこうたらなどは、野暮というものです」と書かれますが、ここも私どもと大きく見解の異なるところがあります。「絵本は著者にとって文章も絵もたいへんな時間と労力をかけて完成した作品です。その作品を原作のイメージを損なわないようにしてほしい」と考えるのは、著者や出版社のわがままであり野暮なのでしょうか？」

とお書きですが、大型絵本をすべて否定するものではないという意味は、絵本の表現の一つとして当然大型の絵本もありうるという意味です。このことは第1回の大和さんに対しての質問のおり、片山健さんの大型絵本『えんそく』（架空社）の例をとって申し上げていることです。この点誤解のないようお願いいたします。

続いて、「原作のイメージがどうたらこうたらなどは、野暮というものです」という部分を取りあげて、あたかもぼくが原作のイメージをないがしろにしてもよいと言っているように強調しております。しかし、この前後の文をよく読んでいただければ、意図的に曲解しない限りは、全然別な意味で「野暮」と言ったことがご理解いただけないと思えます。

「野暮」と言ったのは、原作を読んでもらった子どもたちが、その絵本にたいして共通のイメージをもつことで、絵本の世界を二次的に遊ぶ一環として、その中には大型絵本の制作もあるだろうから、そのこと

にいちいち原作のイメージ云々は「野暮」というものだと言ったのです。

もし、このことを否定なさるのでしたら、福音館が出した『これが絵本の底から!』(谷地元雄一・著)の内容をも大和さん自身が否定することになりませんか。

ぼくは出版された絵本をどのように楽しもうが読者の自由だと思っておりますから、その楽しみ方まで口を出すのは「野暮」だと言ったのです。「ここも大きな誤解をなさっていると思います。もっとも、これはぼくの拙文が理由かもしれませんが・・・」

さらに、
「絵本は著者にとって文章も絵もたいへんな時間と労力をかけて完成した作品です。その作品を原作のイメージを損なわないようにしてほしいと考えるのは、著者や出版社のわがままであり野暮なのでしょうか?」
という箇所ですが、この部分は大和さんはぼくの意見を歪曲しています。

これは、小泉首相が憲法の前文の一部を都合良く引用して(誰も否定できないことをつまみ食いして)、自衛隊のイラク派兵を正当化したのと全く同じ論理だと思いません。

始めに書きましたように、そもそも今回のぼくの出発点は、福音館の「大型絵本」制作が優れた絵本の原作のイメージを損なうという批判から始めたことを思い出していただけないでしょうか。このことを踏まえていただけたならば、大和さんのこのような批判は、歪曲なしには書けないとおもいますが・・・。

今度の大和さんのお答えは、まだ多くの点で、こちらの質問を意図的に歪曲したり、そらしたりしていますが紙数の関係で別の機会に回します。

それと、今回はつきりしたことでありますが、論点の微妙なずれを感じました。考えてみますに、これは、ぼくに返事を書くにあたっての大和さんの前提が、ぼくの求めているものとは違っていることによるのではないのでしょうか。

ぼくの今回の一連の発言は、稚拙ながらも自分の「絵本」に対しての考え方や思い入れを前提にして、福音館書店の「大型絵本」制作に対する疑問や批判を書き添えてきたつもりです。

ところが、これまでの大和さんの2度の回答は、もうすでに12冊の大型絵本を出版してしまっただけということもあるのでしょうか、自分たちの「大型絵本」の出版に対する擁護論から出発しているのだと思います。

もし、福音館がこの大型絵本の制作に確固たるビジョンを持って取り組んだのであれば、もう少し格調高くご意見を開陳するのではないかと思えてなりません。福音館書店とはそういう出版社だと、ぼくは認識しているのです。

さて、このようなことを繰り返しても水掛け論になるばかりだと思えますから、もう少し生産的な提案をさせていただきます。

実は、ぼくは今回の大和さんのお返事の中に、この論争(?)を水掛け論に終わらせずに、さらに深めることができるのではないかと感じた箇所を発見しました。これに再度お答えをいただくことによって、せっかくはじめた論争をお互いが「言いつばなし」に終わらせないで、実りあるものにするという考えに至りました。

それは
大型絵本が原本よりもどう迫力が増し、いかに細部を楽しむことができるようになったのかを、やはり具体的に説明していただくことだと思えます。と言うのは、このことを語っていただくことこそが、とりもなおさず、大和さんの絵本にたいする考え方が明らかにになると思えるからです。(くどいですがね)

もう一つ、
伊藤さんが「冗談半分に読者がピーターラビットを大型にしてほしいといったらしてしまつのではないかと心配になった」とありますが、小社はピーターラビットを大型絵本にする考えはございません。

という箇所ですが、なぜ「ピーターラビット」を福音館が大型化しないのか、そして、なぜ「ぐりとぐら」を大型にしたのかを詳しく語っていただくことで、「絵本」とは何であるかという、大和さんのお考えが明らかになると考えます。

最後に、今回の大和さんの回答の中で大きなウエイトを占めていましたが、多くの

保育者や図書館の人たちが喜んで、通常の絵本と大型を使い分けてなんらの違和感も覚えず、子どもたちに絵本の読み聞かせを楽しんでいるとお書きになっていました。

そこで、是非お答えいただきたいのですが、いわばおなじような立場の人でありながらピッポ新聞7月号にお寄せいただいた小泉さんや川口さんの「読み聞かせに大型絵本はいらない」という意見について、どのようにお考えなのかをお聞かせ願えないでしょうか。

大和さん、「大型絵本を考えてみる」も今回で6回目になるものですから、実は本音の部分では、そろそろ終結したいという気持ちを抱いていたのです。ところが、驚いたことに、最近になってこの論争(?)を思いの外たくさんの方が注目してくださっていることを実感いたしました。

今号にメールを掲載させていただいた絵本作家のたむらしげるさんもそうでしたが、一般の読者の注目度も高いのです。

ぼくは絵本の古書をネット上で販売していますが、そのお客さんの中には、振り込み用紙の通信欄に「とても興味深く読んでいます」とか「福音館の考えを知りたい」などという一言が書かれていたり、メールで「自分の大型絵本についてのご意見をお寄せくださった方も複数あります。」

ネットですから、それぞれ立場や地域も

様々(全国に散らばっています)です。そんな中には、子育てをしながら三十年以上にわたって「こどものとも」を中心に福音館の絵本を読んでこられた福音館ファンの方など、福音館にとっても貴重な存在ではないかと思うられる方のご意見もありますよ。

こんな人たちの注目を前に、これは中途半端で終わらせることができないなど、意を新たにした次第です。

お忙しいことは充分承知しておりますが、どうぞ再度のお返事をいただけることを期待しております。

先日北アルプスを縦走してきましたが、すでに山は少しだけ色付き始めていました。里もまもなく秋が訪れることでしょう。季節の変わり目は何かと体に変調をきたすこともございますから、どうぞお体を大切になさって下さい。

ピッポ 伊藤俊男

インフォメーション

岩波書店と福音館書店から注目の新刊絵本が発売になります。

*バージニア・リー・バートンの新刊絵本2冊が岩波書店から発売!

『はだかの王さま』(アンデルセン・文
バートン・絵 乾侑美子・訳 1765円)
『ビュンビュンきしゃをぬく』(アーナ・
ボンタン&ジャック・コンロイ・文 バー
トン・絵 1765円)

9月22日予定

*安野光雅の『旅の絵本』発売!

(安野光雅・作 1365円 福音館書店)

アンデルセン生誕200年を記念して、
「旅の絵本」はデンマーク編です。人魚
姫や親指姫のお話を始め、70話ものアンデ
ルセンの童話の場面が随所に隠されていて、
デンマークの町をのんびり旅しながら、ア
ンデルセンの世界を楽しめる絵本です。

10月上旬発売予定です。

予約受付中!

今月の「お話会」はお休みします

編集後記

山小屋の物の値段は高所にある小屋ほど高いのをご存知でしょうか。先日の山行のおり、槍の肩の小屋で、美味しそうだったのでトマトを一個買ったのですが、300円でした。下つてきて、穂高平小屋でもまた食べたくなり、買いましたが200円でした。さらさら下つて新穂高温泉では100円でしたが、買いませんでした。ぼくは300円のトマトが一番安いと思いました。